

戲伝写楽

装幀 烏井和昌

目次

戯伝写楽

7

あとがき

140

上演記録

145

戲伝写楽

●登場人物

齋藤十郎兵衛

おせい

おうい

鉄藏

葛屋番頭

与七

市助

葛屋重三郎

高島おひさ

喜多川歌麿

難波屋おきた

大田南畝

浮雲

鶴屋喜右衛門

中山富三郎

おるみ

おくき

— 第一幕 —
その男、十郎兵衛

【第一景】

寛政六年（一七九四）江戸の街。一月。

正月祝いでにぎわう往来。その雑踏の中、姿を現す一人の男、斎藤十郎兵衛だ。どこかこの街に居所がない風情をしている。だが虚無的ではない。野心と焦りが同居している。獲物を探すように人混みを足早に歩いている。と、若い女が姿を現す。こちらも同居していないように歩いて、しかし、周りの物全てが興味深いのか、町の雑踏をすみずみまで凝視している。おせいという女だ。

十郎兵衛とすれちがうおせい。おせい、ふりむく。十郎兵衛が気になった様子。その視線に気づいたのか十郎兵衛も振り向く。

二人の視線が交差する。

が、すぐにおせいは人混みの中に消える。

十郎兵衛、追おうとするが、そこに別の男が声をかける。与七よしちだ。十郎兵衛の友人で浪速言葉を使っている。

与七　　十さん、十さん。

十郎兵衛　与七か。

与七

どこいくんや。敵は丁子屋の座敷やで。さつき、蔦重が大田南畝と入っていきよった。もうすぐ歌麿も来るらしい。

十郎兵衛

蔦重、歌麿、蜀山人か。かますにはいい相手だ。行くぜ、与七。

と、二人人混みに隠れる。

と、ひときわ目立つ美人が現れる。難波屋おきただ。

それを見つける三人の女、町人のかみさんという風情。

おるみ

あれをご覧。

おくき

難波屋おきた。

おうい

今や江戸一番の美人と評判さ。

と、反対側からくるもう一人の美女。

おるみ

あれ、もう一人来たよ。

おくき

高島おひさ。

おうい

これも江戸一番の女っぷり。

おるみ

今評判の浮世絵師、喜多川歌麿が描いたって大人気の大首絵、中でも極めつきの美女二人だ。

おくき　でもね、江戸一番が二人いるわきゃない。
おうい　すべてはあの先生の仕業。あの先生の絵筆が女心を狂わせるのさ。

と、さししめすところに通りかかる一人の絵師。

羽振りのよい格好。愛想はいいがその目の奥には冷たさがある。喜多川歌麿だ。

おきた

歌麿先生。

と、すり寄るおきた。

おきた

お世話になっております。おかげさまで江戸一番の女つぶりと評判で。これもみな先生の筆のおかげ。

歌麿

ああ、そうかい。

そこに割り込んでくるおひさ。

おひさ

（おきたに）ふん、江戸一番とは厚かましい言い草だね。（歌麿に猫なで声で）先生、ご無沙汰してます。この間仰っていた大首絵の第二弾、是非ともお願いいたしますわ。

歌麿

お前さんの顔、崩れてきたね。

おひさ え。

歌麿 よかったねえ、一番綺麗な頃の顔を私に描いてもらって。

おひさ ええええ。

おきた (声を上げて笑い) ふん、だからいわんこっちゃない。先生江戸一番のこの私ならもう

一枚書く気も出るってもんでしよう。

歌麿 ……人気って水は怖いものだね。なけりやあ枯れちまうが、やりすぎると根から腐ら

せちまう。あれだけ美しかった花がもう根腐れを始めてるよ。

おきた ……。(絶句する)

スタスタと先に進む歌麿。

それを見ているおかみ三人衆。

× × × ×

遊郭、丁子屋。店に入っていく歌麿。

と、廊下で浮雲うきぐもと出くわす。吉原一と評判の花魁だ。

浮雲 「根腐れを始めてる」。怖い言葉でありんすねえ。

歌麿 浮雲か。

浮雲 さすがは天下の喜多川歌麿先生。女が言われて一番怖い言葉をさらりとお使いなさる。

歌麿、微笑むとそのまま通りすぎようとする。

浮雲 お待ちなんし。先生はあちきことがお嫌いか。

歌麿 吉原一の花魁と噂に高い浮雲だ。誰の手にも入らぬ高嶺の花。この江戸にあんたを誰が嫌う者がいるかね。ましてや私はたかが浮世絵の絵師。私が花魁を好こうが好くま
いが気にすることはない。

浮雲 ではなんであちきを描いてくれない。

歌麿 まだ咲かぬ花を見つけて私の筆で咲かせれば、人は驚き金を払う。だけどね、今が盛
りの花をどんなにうまく描こうとも、人は驚きはしないのさ。

浮雲 あとは落ちるだけの花は、面白うござんせんか。

歌麿 ……こわいね、花魁は。確かにあんたは美しい。でもその美しさはピンと張り詰め
たざりざりの美しさだ。へたに私の筆が触ると、そのざりざりを壊しちまう。

浮雲 ……。

歌麿 世間を浮かれさせると書いて浮世絵だ。私が描くのは泡沫うたかただよ。人の現うつろの向こうに見
える夢幻ゆめまぼろしさ。あんたが求めてるような絵じゃないよ。

そういうと立ち去る。その後ろ姿を見つめる浮雲。納得いつてない表情。

浮雲 それでも私は私が見たい。

中島かずき（なかしま・かずき）

1959年、福岡県生まれ。舞台の脚本を中心に活動。85年4月『炎のハイバーステップ』より座付作家として「劇団☆新感線」に参加。以来、『髑髏城の七人』『阿修羅城の瞳』『朧の森に棲む鬼』など、“いのうえ歌舞伎”と呼ばれる物語性を重視した脚本を多く生み出す。『アテルイ』で2002年朝日舞台芸術賞・秋元松代賞と第47回岸田國士戯曲賞を受賞。

この作品を上演する場合は、中島かずきの許諾が必要です。

必ず、上演を決定する前に申請して下さい。

(株) ヴィレッジのホームページより【上演許可申請書】をダウンロードの上必要事項に記入して下さいまで郵送してください。
無断の変更などが行われた場合は上演をお断りすることがあります。

送り先：〒160-0022 東京都新宿区新宿3-8-8 新宿 OT ビル 7F
株式会社ヴィレッジ 【上演許可係】 宛

<http://www.village-inc.jp/contact01.html#kiyaku>

K. Nakashima Selection Vol. 29

戯伝写楽

2018年1月1日 初版第1刷印刷

2018年1月12日 初版第1刷発行

著 者 中島かずき

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03(3264)5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1697-5 ©2018 Kazuki Nakashima, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします